

県立千葉盲学校 の実践について

協議の記録

Q1：重複障害のある児童生徒には、ICT機器を活用して、どのようにして、グローバル教育を行っているのか。

A1：重複障害の児童生徒には、直接に触れあう交流活動をとって、音楽の授業での歌の発表や作業と一緒に七夕の装飾を行った。ともにお互いを理解しようとする気持ちが感じられた。重複障害の児童生徒にICT機器の活用は難しいことから、前段階として直接触れ合う活動が大切であると考え、取り入れたが大きな成果があった。また、相手校からもとても有意義であったとうかがっている。

Q2：段階表は、一人一人の子供の成長過程において、どのような機器を活用しているのか大変わかりやすいと思うが、すべてのお子さんを見て特徴のようなものが見つかるのか、例えば、「この障害では、これくらいのものを使えば効果的だ」というものが見て取れるのか、また、段階表を今後どのように活用していくのか具体的に教えてほしい。

A2：例えば、全盲の生徒の場合、触る絵本で絵の存在や拡大文字で字の存在を認識する。また、ルーペや単眼鏡、拡大読書器は使用しない、点字の利用まで悪くならない生徒には、点字で読み書きできるまでの導入指導はしないなど、視覚障害教育に関わる職員には経験から得た指導技術を持っているが、段階表はその経験値をデータ化することで客観的な指導が可能となり、新任教員にも有効な指導資料となる。また、客観的なデータとして、個別の指導計画や個別の教育支援計画にも活用していきたい。

室長の講評

成果報告から研究内容は大きく2つある。1つは、グローバル教育とICTの活用、もう1つは、ICT機器の活用段階表の作成である。

グローバル教育において、生徒がICTを活用した交流経験を通して、自分に自信をもつようになり、英語検定といった資格取得に挑戦したり、進路に対して積極的な姿勢が見られるようになった、という大変嬉しい成果があった。生徒の成長が、具体的な形で手に取るように見られたことは、本当に嬉しいことであり、印象に残った。今後も、生徒の経験的な取組を大切にしていきたい。大勢の前で英語でスピーチする、あるいは、英語で1日生活する、などはなかなかできない経験であるが、こうした経験が生徒自身の「主体的な学び」に繋がる。ぜひとも、こうした取組を今後も続けてほしい。

次に、活用段階表について、児童生徒が使用しているICT機器を定期的に観察・記録した一覧に整理したものが段階表である。今後、記録を続けていくことにより、データが増えていけば、段階表の精度も高まり、障害が似た他の児童生徒にも活用できる可能性を改めて感じた。この段階表の記録についてはぜひ、「個別の教育支援計画」にも残し、一貫した支援ができるように引き継いでいただきたい。

今後もこの段階表の記録を継続していただき、視覚に障害のある方にとって有効なICT機器を選択する際の一助になればと、期待を大きくしてくれた研究成果であった。